'Mopsae' の発音

今 里 智 晃

I

英語音韻史においていわゆる 'Mopsae' の発音に言及したのは，Gill (1621)[1] が最初である。Alexander Gill (1565－1635)[2] と言えば，英語の綴り字改革論者としての業績が引き合いに出される場合が多い。Gill 自身は Oxford の Corpus Christi College で教育を受け，1608年には Richard Mulcaster——彼は音のみに依存しては混乱が生じるとして綴り字改革は主張しなかった[3]——の後を継いで London の St Paul's School の校長 (Magister primarius) になった訳であるから，教育者としての立場からすればそれも当然のことと言えよう。しかし，それに比べると Gill の 'Mopsae' 論については，Horn (1954)[4] と Dobson (1968[2])[5] を除いてはあまり取り上げられることはなかった。そこで，本稿では Gill の 'Mopsae' 論を再考し，それが Horn と Dobson にどのような形で受け継がれたかを考察してみたい。

II

'Mopsae' とは Gill が校長として奉職した St Paul's School の生徒達の母親のことである。Gill 自身この語を明確に定義している訳ではないが，16世紀の後半から 'mops' という語が若い女性にたいする愛称として用いられたことから，彼がこの 'mops' をラテン語形 (女性名詞複数) の 'Mopsae' にして使ったと考えることができる。[6] 初老の教育者——Gill が *Logonomia Anglica* を出版したのは54歳の時であった——の眼から見れば，生徒達の母親も当然ながら 'Mopsae' に違いない。そして，校長の Gill のところにやって来てあれこれ話をする母親達の発音の仕方に Gill がどのような反応を示したかは，彼の方言に対する態度を見れば容易に想像がつく。

Gill (1621：Cap. VI) には主要な方言 (dialecti praecipuae) として次

の六種類のものが挙げてある。共通語（Communis），北部（Borealium），南部（Australium），東部（Orientalium），西部（Occidentalium），そして雅語（Poetica）である。これは初期近代英語の方言を音韻の面から概説した最初のものであるが，同時に方言に対しては，例えば二重母音の個所で，

> Diphthongi sunt propriae, aut impropriae: proprias dico quae apud homines cultioris sermonis in usu sunt; improprias, quas dialecti tantùm usurpant.
>
> （二重母音にも適不適がある。言葉の洗練された人々の間で用いられているものを適と呼び，方言において甚だしく用いられるものを不適と称する）

のように価値判断を下している点に特徴がある。Gill は「言葉の洗練された人々」の発音を規範にすべきと考えてそれを「適」（proprias）とし，方言の発音を「不適」（improprias）と断じた。Zachrisson（1913：175）[7] はこの点を評して，

> Gill not only teaches what he considers to be the correct usage in matters of pronunciation, but he also gives information on sounds which in his opinion were incorrect or dialectal.
>
> （Gill は発音の問題については，自分が正しい用法と考えたものを教えるだけでなく，自分の意見で正しくない，つまり方言用法の発音に関する情報も与えてくれる）

と述べている。Gill の言う「言葉の洗練された人々」とはとりもなおさず上流階級の人間を指すことになるが，本来ならそこに属すべき'Mopsae'は発音の点でもちろんそこには属さない。

では，'Mopsae'は一体，どのような発音をしたのか。

1）lën[8] for laun (*lawn*)
2）këmbrik for kämbrik (*cambric*)
3）këpn / kïpn for käpon (*capon*)
4）biccherz mït for bucherz mët (*butcher's meat*)
5）ʒintlimin for ʒentlewimen (*gentlewomen*)
6）mëdz for maidz (*maids*)

Gill は，「（彼女たちは）全てを薄く（発音）する」（omnia attenuant）とその発音の特徴を記した。「薄い発音をする」（attenuo）というのはラテ

ン文法の用語で，母音の調音点が標準より高くなることを示す。つまり'Mopsae'は，*lawn*（薄地のリンネル布）や *cambric*（白麻のハンカチ）それに *maids*（未婚の娘，女中）などの語については，母音を［æ:］ではなく［ε:］で発音していたのである。なお，3）の *capon*（食用のおんどり）は，Gill の言葉を借りれば，「käpn を食べるのではなく，këpn を，いや殆ど kïpn を食べる」(nec edunt käpn, sed këpn, et ferè kïpn）ということで，これは当時の標準的な［æ:］よりもずっと高い調音点で発音されていたという証言になっている。4）の *butcher's meat*（食用の獣肉）や5）の *gentlewomen*（良家の婦人）については，［e］から［i］に引き上げられている。

さらに Gill が 'Mopsae' の発音として挙げているのは，次の例である。

7）I pre ya gï yar skalerz lïv ta plë

7）は，Gill によれば，当時の発音では，

I prai you giv yür skolars lëv tu plai

(*I pray you give your scholars leave to play.*)

となるのが普通であった。が，ここでも同じ現象が生じている。

8）pre for prai (*pray*)

9）gï for giv (*give*)

10）lïv for lëv (*leave*)

11）plë for plai (*play*)

つまり，8）と11）は［ai］から［æ:］段階を経て，それぞれ［ε:］にまで調音点が上がっているし，10）も通常の［ε:］から［i:］に引き上げられている。9）については［i］が長音化されただけだが，語尾の子音の脱落により強調がおこなわれたことが想像できる。これらの例から，'Mopsae' の発音には標準的な発音よりも高音化の傾向が顕著に見てとれる。

発音についての Gill の観察力は，Dobson（1968[2]：143）も「完全に正確である」(perfectly accurate）と保証している程であるから，当時の標準的な発音に比べて，少なくとも一段階以上高い調音点で母音を発音する女性達が確かに存在したことについては間違いない。そして，直接的に「適」（proprias）あるいは「不適」(improprias）という価値判断こそ下してはいないものの，方言に対する態度から見れば，Gill が'Mopsae'の発音にたいしては否定的であったと推測することができよう。

Ⅲ

'Mopsae' のこのような発音を Dobson (1968[2]：601) は東部方言 (Eastern dialect) と結び付けて考えた。それも当然で，'Mopsae' の発音は Gill (1621：Cap. VI) では東部方言を扱った節の中で言及されているからである。その東部方言について Gill は，

> *Orientales contra pleraque attenuant: dicunt enim fir, pro fjer ignis: kiver, pro kuver tegmen: ea, pro a. to deans, pro dans saltare:...*
>
> (これに反して，東部の人々は一般に薄く発音する。例えば，彼らは「火」を fjer ではなく fir と発音し，「被う物」を kuver ではなく kiver[9] と発音する。また「踊る」を dans ではなく deans という具合に a の代わりに ea と発音する...)

と冒頭でその特徴を述べている。東部方言の特徴が「薄い発音をする」(attenuo) 点にあるとすれば 'Mopsae' の発音と同一であり，しかも 'Mopsae' の発音が東部方言の記述のあとのところに扱われているので，両者を結びつけて考えるのは Dobson の指摘を待つまでもなく自然なことである。ただ問題は，Dobson (1968[2]：149) は 'Mopsae' の発音が東部方言に由来すると推断したことである。

> Gil merely says that the *Mopsae* 'affect the thinness' which is characteristic of the 'Eastern dialect'; but it seems reasonable to assume that the pronunciations of the *Mopsae* not only resemble, but are actually adopted from, the 'Eastern dialect' (i.e. above all that of Essex), which might *a priori* be expected to influence London English.
>
> (Gill はモプセが「東部方言」に特有の「薄さを気取っている」と述べただけである。が，モプセの発音は単に「東部方言」に似ているとするだけではなく，実際「東部方言」(とりわけエセックス方言) ——これがアプリオリにロンドン英語に影響を及ぼすことになると考えられる——から採ったものであると仮定しても無理ではないように思われる)

しかし，このように推断しても，それでは何故'Mopsae'のみが東部方言の影響を受けたのかということが依然疑問として残る。ロンドン方言は元来エセックス方言であったので，東部方言がロンドンの進歩的な方言に影響

を及ぼしたと考えるのは正当な仮説である。しかし，それならば影響の範囲はロンドン方言の全般（あるいは少なくとも相当の範囲）にわたらねばならないのであり，'Mopsae' のみがその影響を受けたというのでは不自然ではないか。'Mopsae' の発音が東部方言に由来するとする Dobson の仮定の根拠は，Gill が東部方言の節の中に扱っている点だけなのである。それゆえここに方言の発音を持ち出すことはむしろ deus ex machina 的な論法であって，Gill が東部方言のところで扱った理由は，'Mopsae' の発音が東部方言に特有の「薄い発音」と偶然似ているということを指摘するためであったと解釈する方が妥当であろう。

既に前述した通り，'Mopsae' の発音は当時の標準的な発音より高い音調を示していた。その典型がⅡの 2）*cambric* と 3）*capon* の ME *ā* である。ME *ā* は正音学者のさまざまな証拠[10]からすでに15世紀中に前母音化していたと考えられるので，Gill の ä は彼自身の説明こそないものの［æ:］に対応するものと判断できる。ところが，Gill によれば 'Mopsae' は *cambric* を［kæ:mbrik］ではなく［kɛ:mbrik］と発音し，*capon* にいたっては［kæ:pn］ではなく［kɛ:pn］あるいはほとんど［ki:pn］のように発音していた。ただし，ME *ā* が［i:］段階まで上昇した例はないので，Gill の言う 'ferè kïpn' は実際には close［e:］であったとみなす方がよい。[11] また，1）*lawn*，6）*maids*，8）*pray*，11）*play* などの語にある ME *ā*（<ME *au, ai*）も 'Mopsae' にあってはそれぞれ［ɛ:］段階（8）について Gill は短母音の［e］としているが，これは挿入句的な個所での発音という特殊事情と考えられる）で発音されていた。これらの語について16，17世紀の正音学者たちの間でははっきりと二重母音であることを書き留めていた者の方が多い[12]のであるが，なかには Hart（1569）[13]のように例えば ME *ai* を *ę̄*，つまり open［e:］であると記述したものもいる。Jespersen（1909：245）は 1）*lawn*，2）*cambric*，3）*capon* の発音をそれぞれ［le˙n］［ke˙mbrik］［ke˙pn］または「ほとんど［ki˙pn］」としているが，Jespersen の［e˙］という表記は close［e:］であるのでこの発音については時期が早すぎる。何故なら，ME *ę̄*［e:］が遅くとも1500年以前に［i:］段階に上昇したのに対して ME *ę̄*［ɛ:］の方は依然として open［e:］のままであったから，Dobson（1968²：617）の言葉を借りれば，「15，16世紀，それに17世紀の初期に，教養ある人々が注意深く使う標準英語には閉じた［e:］はなかった」（In the fifteenth, six-

teenth, and early seventeenth centuries, careful educated StE had no close [e:] sound.) のである。[14]

もう一点'Mopsae'の発音に見られる特徴は，4）*meat* や10）*leave* の ME ę̄ である。Gill によれば，'Mopsae' はこれらの語を [mït]，[lïv] と発音した。ところが，Gill の時代すなわち17世紀の初期には，前述したような状況で標準的な発音で close [e:] は存在しなかったのである。ということは，Gill がこれらの語の標準的な発音として記述した [mët]，[lëv] の ë は [ɛ:] つまり open [e:] のことであったと判断してよいことになる。それでは ME ę̄ を持つ語についてはどうであったかというと，Gill (1621：Cap. III) に「それゆえ ï は例えば sïn (「見られた」の *seen*) のように長い」(longa sic ï ut in sïn seene visus) と記述があるところから，彼は ME ę̄ を持つ語には ï という表記を用い，ME ę̄ を持つ語には ë を用いるという具合に両者の発音に明確な区別をつけていたことが分かる。[13] *Logonomia* には ME ę̄ を持つ語が他にも多数（幾つかを例に出せば *bean, beast, cease, eagle, heathen, please, read, sea* など）あるが，それらの表記がほぼすべて ë で一貫していることがこのことの裏付けとなる。[16] したがってこれらのことから，Gill が [mɛ:t]，[lɛ:v] という発音を当時の標準と考えていたこと，それに対して'Mopsae'はそこから二段階も高い音を用いて [mi:t]，[li:v] と発音していたこともはっきりと分かる。

このように 'Mopsae' が当時の標準的な発音よりずっと高い調音点で発音する傾向を見せたことに対して，Dobson は「進んだ発音」(advanced pronunciations) と解釈した。[17] これは定義の上では Horn (1954：82) のいう「進んだ発音」(die fortschrittlichen Lautungen) と一致する。が，認識の上では両者の間に二つの点で大きな違いが見られる。第一に，Gill の教えた発音が保守的なものであったかどうかについてである。Dobson (1968[2]：154) は *Logonomia* は1600年頃の発音を記述したものとみなすのがよいとして，

> ... Gil's transcriptions are a reliable representation of a real pronunciation which was not unusually conservative, though in some recognizable particulars it seems have been formal rather than colloquial; this pronunciation may be assumed to have been in use among educated people about the end of the sixteenth and the beginning of the seventeenth centuries.

（ジルの音声記号はそれほど保守的なものではなかった実際の発音を表すものとしては信頼性があるが，細かい点では口語用法というよりむしろ改まった用法であったと思われるところもある。したがって，この発音は16世紀末から17世紀初期にかけて教育のある人々の間で用いられたと仮定してよい）

と述べている。これは Gill に対する積極的な評価とみなすことができる。[18]

逆に批判派としては Wyld や Horn の名を挙げられよう。Wyld（1920：169）は感情を表に出して，Gill を「つむじまがりで，かなり馬鹿げた人物であり，自説通りであったとすれば，よほど厭味な英語を話したに違いない」（a cantankerous and rather ridiculous person, who, if he lived up to his theories, must have spoken a detestable English）と非難した。一方 Horn（1954：81）は Wyld ほど過激ではなく，

Maßgebend ist für ihn die Sprach der „docti, aut culte eruditi viri": „in sermone consuetudo doctorum primaria lex est".[19] Was Gill lehrt, ist in vielen Fällen als künstliche, theoretische Sprache zu betrachten; er gibt die Aussprache, wie sie nach seiner Meinung eigentlich sein sollte, nicht wie sie wirklich war.

（彼が規範とするのは「学識豊かで教養のある人々」の言葉である。「言語においては，学識のある人物の慣習が最大の規則である」Gill が教えるものは，多くの場合人工的で理論的な言葉とみなすべきである。彼は自分の考えで本来かくあるべしという発音を挙げているのであって，実際かくあった発音ではないのである）

と穏健な調子で Gill の英語を批判した。しかし，Gill が名門校の校長として教育的立場から英語の状態を観察した結果，改革の必要性があるとして *Logonomia* を著したとすれば，そこに書かれた発音が保守的なものとみなされるのもある意味では仕方がない。この書物の副題「それによって国語が容易に修得される」（quâ gentis sermo faciliùs addiscitur）こそ，Gill が何を目指していたかを端的に物語っているのである。

第二の違いは 'Mopsae' 観にある。既にⅡの冒頭で明らかにした通り，Gill の名付けた 'Mopsae' がほかならぬ自分の学校の生徒の母親を指すことはまず間違いない。Horn（1954：81）もその説をとる。「ジルはさらにロンドンの自分の学校の生徒の母親から聞いた発音に言及し，彼女たちを „Mopsae" と名付けた」（Er spricht auch von den Sprache, die er von den

Müttern seiner Londoner Schüler hört — er nennt sie „Mopsae".) Zachrisson (1913：176) も同じであるが，「セント・ポール校の生徒の母親，つまり十中八九は教育のある階級のご婦人たち」(the mothers of the boys at St. Paul's school, i.e. in all probability... ladies of the educated classes) と範囲を少し広げている。いずれにせよ'Mopsae'がある限られた範囲の女性たちを指す語として使われたのは明らかである。ところが，Dobson には 'Mopsae' をはっきり定義することを避けている節がある。おそらくは，Gill (1621：Praefatio) で最初に出てくるのはこの語ではなく 'Mopsarum fictitias' という語なので，前後関係からこれが「女性らしい気取り」を意味するのは分かるにしても「女性らしい」が必ずしも女性のみに当てはまるとは限らないと考えたためであろう。それで，Dobson (1968[2]：85) は脚注で「気取り屋で，おそらくは気まぐれな女性。語義としては粗野な女性ぐらいが当てはまるであろう」(affected, perhaps wanton women, and 'wenches' might seem a good gloss.) とした。しかし，Gill は 'Mopsae' の発音に言及した次の個所で「例えば（彼女たちは）しばしば私に向かって『どうぞ生徒たちに遊んでもよいと許可をお与え下さい』とピーピー声で話しかけてくる」(sic enim aliquoties ad me pippiunt: I pre gï yar skalerz lïv ta plë;...) と書いているのである。校長に向かって気取った様子でこのような内容の話をする女性が 'Mopsae' であるとすれば，生徒の母親以外考えられないではないか。このように女性が気取って話しをすると母音が高くなる現象が見られることに触れたのは，Gill が最初ではない。Smith (1568：16) にも「愛嬌のある若い娘たちには，もっと上品に話していると見られたいために，そのような発音をする者もいる」(mulierculae qaedam delicatiores, et nonnulli qui volunt isto modo videri qui urbanius) として，[ai] を [ei] と発音する例が出ている。[20] したがって，そのことを取り上げるか否かはひとえに正音学者次第だが，Gill のいう 'Mopsae' たちが当時存在していたことは疑う余地はない。

Ⅳ

Gill の教えた発音が古めかしいものであったとする点においては，Horn (1954：82) では「古めかしい，ペダンティックな言葉使い」(altertümlich-pedantische Sprache)，Dobson (1968[2]：131) では「当時では古めかしくなっていたかも知れない」(...may have by that time be-

come 'old-fashioned') というように，認識に程度の差はあれ両者の意見は一致する。ME *ā* と ME *ai* をまだ区別していた点や現実の発音に対応する音声表記に工夫が見られなかった（例えば，ME *ā* の［ε:］に対応する表記）点などが，その根拠になる。しかし他方，当時の主要な方言についての概説，とりわけ 'Mopsae' の発音に言及した点に音韻史から見た Gill (1621) の真の意義がある。そして，'Mopsae' の発音を当時の進歩的なロンドン方言と結びつけることは何ら差し支えない。

Notes and References

1) Gill, A. 1621. rpt. 1968. *Logonomia Anglica*. Menston: The Scolar Press.
2) 生まれた年を1564－5年という具合に記す方法があるが，これはもちろん Gregory 暦の改正によって旧暦を換算したためである。姓の Gill についていえば，Dobson は Gil としている。*Logonomia* の著者名には Alexandro Gil と記されているが，これはいうまでもなくラテン語式に直したものである。*DNB* や Allibone, *Dictionary of Authors* を代表とする人名辞典はもちろんのこと，研究書でも普通 Gill を用いている。
3) Mulcaster は英語を固定化（fixing）する必要性があることを唱えた。彼は16世紀後半から生じた綴り字改革運動の流れに対してむしろ伝統主義――これはやがて F. Bacon, Dr. Johnson らに受け継がれる――の立場から徒らな改革より固定化を主張したのだが，今から顧ると17世紀後半に始まる英語の統一・固定化を求める運動を約一世紀先取りしていたと言える。渡部昇一 1965.『英文法史』東京：研究社；1975.『英語学史』東京：大修館を参照。
4) Horn, W. 1954. *Laut und Leben — Englische Lautgeschichte der neueren Zeit (1400–1950)*. Berlin: Deutscher Verlag der Wissenschaften.
5) Dobson, E.J. 1957, 1968². *English Pronunciation 1500–1700*. Oxford: The Clarendon Press.
6) *OED* によれば'mops'の初例は1565年。これは Arthur Golding によるオウィディウス『メタモルフォセス』の英訳版（*Ovid's Metamorphoses*）である。Golding のパトロンでもあった Sir Philip Sidney は *The Arcadia* (1590) に羊飼いの娘 Mopsa を登場させていて，彼女が気取り屋なところから，Gill の 'Mopsae' はこれに由来するという説もある (W. van der Gaaf)。また Shakespeare も羊飼いの娘に同じ名前をつけている。(*The Winter's Tale*)。このようにルネサンスの時代に'mops'（人名の Mopsa を含めて）がよく使われていたことは確かであるが，Gill がどこからヒントを得て'Mopsae'を普通名詞として使ったのかという点については Gill 自身の説明がないので推測の域を出ない。因に，ウェルギリウス『田園詩』には Mopsus という羊飼いが出てくる。

7) Zachrisson, R.E. 1913. rpt. 1971. *Pronunciation of English Vowels 1400–1700*. New York: AMS Press.
8) この長音記号（¨）は Gill が1621年の第2版で新たに導入したものである。因に1619年の版では活字が足りなかったためか全体に手書きの部分が多く，長母音については活字の上に手書きの macron を付けて示していた。
9) ［u］と［i］は後母音と前母音の違いこそあれ調音点の高さでは同等であるにもかかわらず［kuver］を［kiver］と発音するのが「薄い発音」と考えられたとすれば，当時の人々には後母音より前母音の方が「薄い」という意識があったということになる。
10) Zachrisson. 1913, pp. 186–190. Jespersen, O. 1909. rpt. 1961–65. *A Modern English Grammar*. Part I, p. 245 をそれぞれ参照。
11) Wyld（1920：211）は，地域方言では ME *ā* や *ai* が［i:］になることも実際には生じた可能性があるので（具体的な証拠を出しているわけではないが），Gill の記述を信じれば当時の標準英語の話し手の中にも［ki:pn］（*capon*）と発音する者は存在したと述べている。しかしこれは Gill の記述の'ferè kïpn'から故意か否か'ferè'（＝almost, nearly）の部分を落として解釈したものである。この'ferè'という副詞がついているからこそ'Mopsae'の kï:pn は［ki:pn］ではなくてもそれに非常に近い音であったという解釈ができる。
12) 16世紀では Thomas Smith, 17世紀では Richard Hodges らの名を挙げることができる。
13) Hart, J. 1569. *An Orthographie*. これについては Luick, K. 1896. *Untersuchungen zur englischen Lautgeschichte*. Strassburg: Karl J. Trübner. §337 を参照。
14) Horn, 1954. p. 237. 今里智晃　1986.「ME *ę̄* と *great* の発音」『言語文化研究』第12巻（広島大学総合科学部紀要V）を参照。
15) したがって，当然のことながら Gill は close［e:］を表わす表音記号を用いていない。
16) *Logonomia* から ME *ę̄* を持つ語を取り出してみると以下の通り。

(i) ë 表記

appease, areads (*3. pers.*), beams (*pl.*), bear (*vb.*), beast, beat, bereave, bread, break, breath, Ceasar, cease, clean, cleave, creance, creatures, dead, deadly, dearth, deceive, displease, displeasure, each, eagle, ear, earnestly, earnestness, earth, earthly, ease, easement, eat, eaves, endeavour, equal, ere, ewe, ewer, fear (*sb. vb.*), fearful, feast, fere, few, forswear, grease, great, greatly, increase, instead, interfere, jesters, lead (*sb.*), leaf, lean, least, leave (*sb.*), mean (*vb. adj.*), means, meat, neat, outpeaking, peace, pease, perch, please, pleasure, preach, present (*adj.*), prevent, read, realm, rear, reason, receive, release, sea, seam, season, sewer, speak, speaker,

spear, streams, swear, sweat, teach, teacher, tear (*vb.*), tears (*sb.*), there, therefore, threating, treason, underneath, uneasy, unmeasurably, veal, weak, wear, weary, were, wheat, where, whereat, wherefore, wherein, yea, year, zeal

(ii) それ以外の表記

beneath [bineth] , conceive [konsev]

なお, these の表記は [ðëth] になっているが, この語は ME ę を持っていた語であるから Gill 式に書けば [ðïth] とすべきだろう。

17) Dobson, 1968[2], p. 149を参照。

18) Jespersen (1909 : 1.42) はこれに対して消極的な評価と言えよう。

19) Gill, 1621. Praefatio.

20) Smith, T. 1568. rpt. 1968. *De recta et emendate linguae Anglicae scriptione, dialogus*. Menston: The Scolar Press.

The Pronunciations of the *MOPSAE*

Chiaki IMAZATO

Among those who dealt with the sounds of English about the end of the sixteenth and the beginning of the seventeenth centuries, Alexander Gill the author of *Logonomia Anglica* (1619, 1621) figured foremost. There are lots of notable particulars concerning the general principles of correct spelling and his phonetic script in the book; moreover, there is an important reference on the pronunciations of the *Mopsae*, the name of the mothers of the boys.

Gill tells us that the standard of correctness in pronunciation is the speech of 'docti, aut culte eruditi viri' (the learned and cultured). It is quite reasonable that he should think so because he was 'Magister primarius' (High Master) of St Paul's school in London. Gill, treating the characterictics of seventeenth-century dialectal pronunciation, illustrates the advanced pronunciation of the *Mopsae*: according to Gill's phonetic script they pronounce, for example, *lën* for *laun* (lawn); *këmbrik* for *kämbrik* (cambric); *këpn* or almost *kïpn* for *käpon* (capon); *biccherz mït* for *bucherz mët* (butcher's meat); *ʒintlimin* for ʒentlwimen (gentlewomen); *mëds* for *maids* (maids). He also reports that the *Mopsae* often say to him, "*I pre ya gï yar skalerz lïv ta plë.*" (I pray you give your scholars leave to play.) Thus the speech of the *Mopsae* shows a strong tendency towards high-pitch vowels.

As Gill says, 'Orientales contra pleraque attenuant,' the Eastern dialect is remarkable for a general 'thinness.' It is quite the same with the pronunciations of the *Mopsae*, because they 'qae quidem ita omnia attenuant.' Judging from the fact that all the other features of the speech of the *Mopsae* have Eastern parallels, Dobson (1968[2]) derives the pronunciations of the *Mopsae* from those of the Eastern dialect, but the present writer proves it unreasonable.